八話

むがしあるけどよ。

あるどこによ、ちゃとあばとえだっけど。そしたばよ、おなごわらし一人えだ、あば死んだけど。そしてこんだ、いまかがもらったけど。いまかがさまだ、おなごわらし生まれだけど。いまかがこんだ、先のあばのわらしどこ、好きでねがったごでエ。そしてこんだ、なんとかして先のわらしどこ、えなぐしてどて、あっちこっちさ頼んだたて、誰ももらってける人えねんだど。それでこんだ、食わせねでおがえねんて、山さ行ったり、川さ行ったりして、たきもの拾うようになってあったもんだど。それでこんだ、いまかがよ、わらしたち二人によ、

「山さ行って、ハギ取ってこい」

って、ゆづけたんだど。

「ハギでもの、なんだべエ」

って、聞いたんだど。

「ハギでものは、こういうかっこうで生えでいる。山さ行って、中指と大指と合わせて、ひとつかみづつ、二人して取ってこい」

とゆづけられで、泣き泣き二人して、ハギ取りに行ったんだど。山さ行ったたて、ハギてものがわがらねべ。二人して山さねまって、

「なんたものがハギだべが」

どて、くどいてねまってだんだど。そしたば、隣のちゃが、山さシバ刈りに来たんだど。

「ちゃ、あばにハギ取ってこいって言われだども、そのハギ知らねんだど。取ってえがねばおごられるし、取っていきてたって、知らねば取らえねんし、なんたのだべエ」

と、聞いだど。

「ハギでものは、こういうもんだんだ」

って、隣のちゃが教えて、取ってけたんだど。あっちから、こっちから一本づつ取ったたて、手さ一つにならねんだどよ。それでこんだ、ちゃに取ってもらって、家さ持ってきたごでエ。

そしたば、いまかがよ、

「ワラしなごいで、打って、ナワっこなえ」

って、ゆづげだんだど。それでこんだ二人して、ワラっこしなごいで、打って、ナワっこなったんだど。そしたば、それでこんだ、

「ヌを編め」

ったど。二人でヌ編んだごでエ。そしたば大っきい釜さ、火たいたんだど。

「なにするんだ、あば」

って聞いだば、

「お前がたさ、イモ煮てかせる」

って、こう言ったんだど。イモごつそうになるにいいど思って、一生懸命にヌ編みしたごでエ。釜の湯っこにたってきたば、その上さヌ渡したもんだけど。

「これ、渡れ」

って、言われだごでエ。

「落ちたらよ、あば」
って、言ったんだど。
「落ちだってなんたごとねんだから、まんず渡れ」
どって、先のあばの子どもが渡されぞごでエ。したばにだってる湯の中さ、ざぼんと落ちだごでエ。死んだべったア。したば、
「あっちゃ渡ったごったば、俺も渡る」
どて、
「お前は渡らねたってエエ」
ととめだだって、渡ったごでエ。釜さ二人落ちで、死んだべェ。こんだ、それ上げてよ、柱の根っこさ、こっちさ一人、こっちさ一人埋めだっけど。そしてこんだ、知らねつらしてえだごでエ。そしたば、ちゃ帰ってきてよ、
「わらしたち、どこさ行ったア」
って聞いだば、
「遊びに行ったべ」
どて、嘘こいだごでエ。したたて、二日たたって、三日たたって、来ねんだど。したばある日、朝まに早く、鳥ことんで来たんだど。したばその鳥こ、パタパタと柱の根っこさおりで、またパタパタととんで、こっちの柱の根っこさくるんだど。その鳥っこが、鳴くのよ。
「いまかがにいじめられで、ハギの橋渡るどて、ひらり、ざぼん」
って、こう鳴ぐんだど。
「さて、不思義な鳥っこえるもんだ」
ど、こう思ったごでエ。まだこっちさとんできて、
「いまかがにいじめられで、ハギの橋渡るどて、ひらり、ざぼん」
って、こういってその鳥っこうだうわけだ。あっちの柱さ行ってはさかび、こっちの柱さ行ってはさかぶんだど、
「これはおがし、なんじょだことだ」
たて、あばなんにも言わねで、知らねふりしてえるんだど。
それでこんだ、隣の家さ相談に行ったんだど。
「はあ、そりゃしゃな、ハギ取りにきて泣いでたのさ、俺、ハギ取って助けだど。まず、そご掘ってみれ」
ど、こういうわけで、掘ってみだど。そしたば、赤むぐれになって、もっちゃこ着て、そごさ埋まってだっけど。
「これ、なんだ」
とて、あばどこさ見せぞど。したば、
「俺あ、知らね」
ってしけど。
「知らねわげねんだ」
どて、隣のちゃど、家のちゃどて聞いだば、こういうわげだと話したごでエ。
いまかがなのでものは、こうだんじゃくなものだからよ、いまかがなどでものは、けるもんでもねく、もらうもんでもねエごど。あばのいうごと聞いで、いまかがもらわぬようにするごど。
あとはとっぴんぱらりのぷう。